

### 自己免疫病のカギ握るたんぱく質確認 東大・徳島大

自己免疫病やアレルギー疾患とかかわりがある細胞の発生や成長に必要なたんぱく質を、東京大や徳島大の研究チームが突き止めた。従来の治療は症状の緩和が中心だが、この細胞を活用すれば副作用が小さい治療法の開発につながると期待されている。米専門誌「イミュニティ」電子版に発表した。

リンパ球の一種であるT細胞は、胸腺でつくられ、病原体から体を守る。このリンパ球が自分の臓器を攻撃しないようにするため、胸腺にある髄質上皮細胞が情報を伝達する役目を果たしていると考えられている。

チームは、この髄質上皮細胞の発生や成長の仕組みに着目。徳島大の高浜洋介教授らは、RANKLというたんぱく質に髄質上皮細胞を増やす機能があることをマウスで確かめた。東大の井上純一郎教授と秋山泰身講師は、髄質上皮細胞を発生、増殖させるにはRANKLのほかにCD40というたんぱく質が必要なことをマウスで確認した。

髄質上皮細胞の発生や増殖を自在に操れば、免疫反応を人為的に制御でき、治療法開発につながる可能性がある。

(高橋雄大、小林舞子)